

ビジョンを語る会（姫路市：産業） 主な意見

- ・ 獲るだけの漁業はお金にならず限界が来ており、漁業者が減少
- ・ 養殖業や観光の要素を取り入れた見せる漁業がこれから先は重要
- ・ 漁業見学で人を呼び込んで、坊勢島を活性化
- ・ 44 ある家島諸島を利用して全国・海外から観光客を取り込む（インフラ整備）
- ・ 治水の要は治山にあり（上流域を保全するためには山をしっかりと守っていくことが必要）
- ・ 林業は人材確保が課題（伐採は機械の導入が進んでいるが、木を植えて育てるのは人海戦術）
- ・ 成熟した森林を放置状態にならないよう人の手でいかに守っていくかが大事
- ・ 将来に期待して 40～50 年前に植えた材木を一斉に切ると金にならないため、伐採時期を延ばすと山が循環しない
- ・ 農業も若者に魅力的に映る仕事にしないとどんどん人が離れていく
- ・ 先進的な技術を活用したスマート農業を導入していかないといけない（若者に魅力的に映り、作業の効率化も図れる）
- ・ 製造業も自動化が進み、従来、職人に頼っていた作業が若い人でもできるようになってきた
- ・ IT 教育を受けた人が今後どんどん増えれば、30 年後に必要な人材が確保できるのではないか
- ・ 二酸化炭素など温室効果ガスの排出の削減を求められる中、二酸化炭素を排出する製造業は業態の変換が迫られる（逆にそれが新しい産業になっていくのかもしれない）
- ・ 人が大事。少子化の中でも尖った人材が出てくることを期待
- ・ 皮革産業も素材を提供するだけでなく、自分たちで商品を作って姫路ブランドを世界に発信することが大事（世界のデザイナーが姫路に集まるような魅力的な皮づくりをしないと 30 年後まで続かない）
- ・ 姫高皮革事業協同組合では、姫路工業高校と連携して将来のクリエイターを育成（デザイナーとして世界の頂点を目指す）
- ・ 菓子業界は閉鎖的であったが、2008 年の姫路菓子博で全国の菓子や技術に触れたことで職人が刺激を受け、業界が活性化
- ・ 人口減少が進み地域の活力が低下する中、新しい産業の育成が必要（中播磨地域の強みを生かしつつ次世代産業を育成）
- ・ 日本遺産に認定された「銀の馬車道」の活用
- ・ 商業では日本遺産・銀の馬車道の活用による活性化に期待

- ・観光産業はまだまだ開拓の余地がある（姫路を中心とした広域観光）
- ・「儲かる第一次産業」が今後のキーワード（コロナ禍で国内の食糧自給率アップが必要。国内のサプライチェーンの回帰）
- ・第一次産業で儲けるためには、消費者に近いところと連携し、卸業者による中間マージンを減らすことが必要
- ・漁業見学船で、魚離れの進む小学生向けに漁業の現状・魅力を発信することで、将来の漁業従事者が出てくることを期待
- ・製造業も若者の力を借りながらデジタル化に挑戦（生まれたときからスマホやインターネットがある世界で育ってきた若者は発想が柔軟）
- ・若手後継者の育成が必要（十分な技術を持っていても、経営全体に目を向けるのに時間を要する後継者が多い）
- ・儲かる企業体質を作らないと後継者は育たない（儲かる事業であれば、モチベーションが向上し、積極的に勉強・活動する）
- ・第一次産業は自然（天候）との戦いであるため、なかなか「儲かる」とリンクしにくい（自然に左右されない農業等の工業化が必要）
- ・第一次産業は体力勝負であるため、若者から敬遠される（儲からないと後継者も育ちにくい）
- ・いくら人材育成、人材確保と言っても少子化で子どもの数が減っている問題を何とかしないと根本的に解決しない
- ・子どもに漁業を継がせるのが当たり前だった時代には、収入面の裏付けがあった（儲かるのであれば今でも親は漁業を継がせるはず）
- ・第一次産業の I ターン者は必ずしも収入目当てばかりではないので、彼らの価値観を知ろうとすることも大事（世代間ギャップの存在）
- ・第一次産業でも農業や林業を組み合わせた多様な働き方が提示（生計を立てるために必要な情報のパッケージ化）され、そうした情報がオープンになっていることが大事（田舎への移住の判断材料になる）
- ・農業では、儲けだけではなく、儲け度外視でも集落営農等で農地を守っていく（農地保全）という考え方がある
- ・小学生向けの菓子アイデアコンテストや菓子教室等を開催し、菓子業界に興味を持つ人材を育成
- ・現場が求める仕事内容と若者が期待する仕事内容の間にあるミスマッチの解消に向けて、互いに歩み寄る努力をすることが大事
- ・これまでの伝統や技術をしっかりと受け継ぎながら、IT 化・スマート化等の新たな時代に対応していくことの両立が今まさに問われている